

「やってみたい!」からはじまる保育をめざして

～子どもと大人が共に育ちあうために～

発 表 者 田部 麗子(西部あおば幼稚園)

指導助言者 仙田 真帆(鳥取短期大学 幼児教育保育学科助教)

司 会 者 生田 華枝(西部あおば幼稚園)

記 録 大塚 優(西部あおば幼稚園)

(1) 主題設定の理由

本園は秀峰大山のふもとの豊かな自然環境に囲まれ、81名の子どもたちが「のびのびと つよく たくましく」の教育理念のもとで日々の生活を送っている。そこで繰り広げられる教職員や保護者、地域の方、そして異年齢交流など様々な人との活動を通じて子どもたちに湧き上がる「なんで?」「どうして?」…そして「やってみたい!!」の思い。そこをスタート地点とし、自身の考えを試したり友だちと意見を交わしたりしながら、実体験を行い、それを振り返り、次の活動へとつなげることで新たな活動への意欲が生まれる。そしてこのサイクルを積み重ねていくことで、子どもたちが達成感を味わい、自立心の育成につながるのではないかと考えこの研究テーマを設定した。

(2) 取り組みについて

平成30年から研究テーマ「心と体も 元気いっぱい!」を掲げ、一人ひとりの発達をとらえながら育ちを見つめなおし、心と体をはぐくむ遊びの体験を取り入れた保育をしていくことを実践してきた。その振り返りのなかで、今後の教師側の配慮すべきことは、自分たちで考え工夫しながら遊べる環境をもっともっと整えていくこと・子どもたちなりのペースで思いを伝え合いながら遊ぶ機会をもうけること・飽きずに遊びこむ「遊びの集中の持続」をするための工夫が課題となり、体力的な事のみでなく遊びに向かう姿勢に対しても注目していく必要性を感じると同時に、その課題を含む本園の保育理念「たくましく」を今一度しっかりと子どもたちと共にとらえていく事の重要性を感じた。そこで令和5年度より「あおばのめざすこども像」と「鳥取県のめざす子ども像 遊びきる子ども」前回の研究「心も体も元気いっぱい!」の課題を加味し、「たくましく」を掛け合わせて遊びこむにはもっと子どもたちが主体的にならなくては…と考えた。子どもたちのしたいことって何だろう?子どもたちの話をもっともっと聴こう!対話が必要だ!と今一度「対話」に注目し、子どもたちの思いやアイデア・発想を大切に拾うことをスタート地点として活動に向かうプロセスを見守っていく研究を始めた。そして研究を通してめざす子ども像として「体験を通して、アイデアや思いを伝えあえる子ども」「共通の目的に向かって、試行錯誤しながら遊ぶ子ども」「遊びの中で、自分のできることを考えながらえ行動し、友だちの意見も尊重できる子ども」の3点をあげ、子どもたちとの対話を中心として、一人ひとりのアイデア、子どもたちの相談や作戦、異年齢の友だちとの関わりのなかでの経験、そして大人の支援。これらが一体となるように遊びに向かう子どもたちに対して、「子どもたちの考えをしっかりと聞き、アイデアを再現できるような物的・人的環境を整えることで、友だちと一緒に共通の目的に向かって夢中になって遊びこむことができ、達成感を育んであろう」と考えていった。

(3) 実践事例(年長 ひまわり組)

1. おいもパーティー

10月上旬に近くの畑に芋ほりに行き、楽しく芋を掘って年中児と力を合わせて芋を運んだり、大きさによって仕分けをしたり、小さいクラスの子どもたちも持ち帰りやすいようにお手伝いをしたりした。そんな中、余ったお芋を見つけたAちゃんの「せんせい、このお芋どうするの?ようちえんでは食べられない?」という一言から教師は楽しいことが始まりそうなチャンス!と子どもたちに判断を委ねることにした。クラスみんなにAちゃんの思いを伝えると子どもたち同士で前にしたことあるハロウィンパーティーのようなお芋パーティーをしたいという話にまとまった。さらに自分たちで料理をするという言葉がかわきりにどのような物を作るのか、小さいクラスにも分けてあげたい、包丁やカップが必要になるなど、教師が話す間もなく意見が飛び交い、こうしよう?これはどう?それいいね!など子どもたちのワクワク感が止まらない相談が続いた。その時一人の子どもが、「決まったことを忘れてしまうかもしれないから先生紙に書いて欲しい!」と言ったので教師は子どもたちの思いを確認しながら話し合いを書記した。一人の子が「皆に見てもらわないといけなから玄関に貼っておこう」といい玄関のみんなの見えるところに貼っておくことになった。担任一人で見守るのは難しいかもしれないから上手な人に手伝ってもらいたいと教師がなげかけると、子どもたちはお家の人に聞いてきてくれて保護者の方にも協力してもらえることになった。そうして教師は手紙をだし、その他に計画書、調理器具の準備、環境整備、アレルギーの確認などを行い、職員の体制作りを含めて職員総動員で計画をすすめていった。おいもパーティー当日は栄養士の保護者の方に包丁の持ち方を教えていただき、子どもた

ち自らが切ったり調理場まで運んだりし、スイートポテトとお芋のおみそ汁を作った。他の学年も年長児が作っている様子を見にきてくれた。子どもたち自身が余ったお芋に気づき、計画し、沢山の決断、子どもたちなりの最大限の配慮をしながら取り組んだお芋パーティー。振り返りでは、「おいしいのができて、とってもうれしい!」「今までで一番おいしかった」「みんながありがとうって言うてくれた」「お芋ほり頑張ってたかった」「作るのが難しかったけんお手伝いしてもらえてよかった」・・・そして「またやりたいね!」という子どもたちの声がきかれた。

2. 作品展 お店屋さんごっこ

作品展ではお部屋に子どもたちの1年間で制作してきたものを飾り、遊戯室は年長組が相談し内容を決めることが多くなってきている。昨年の年長組はお店屋さんごっこをしていたが今年はどうするのか? 去年の経験を思い出しながら考えられると良いなと思いながら子どもたちに聞いてみることにした。すると子どもたちは口々に楽しかったことや嬉しかったこと年中児の時にしたことなどを言い合い、お店屋さんごっこが楽しかった経験からお店の内容を変えてもう一度するという事になった。生活の中で体験したことや行ったことあるお店は表現しやすいのかもしれない...と作りたいお店をどう決めるかも子どもたちに決めてもらうことにした。色々な案をだして相談の結果、フードコート(ハンバーガー、麺屋、スイーツ)・ヘアサロン・ふくびきやをすることに決まった。しかしふくびきやのガラガラするやつは一つずつ玉が出る仕組みではいけないなど作ることが難しいという話になり、教師に作ってほしいとお願いしてきた。教師も難しいので誰か作るのが上手な人がいないか問題提案をしたところ、日ごろから色々な物を作ってくれているバスの先生がいいのではと一人の子が発言し、頼むことになった。必要な材料や道具も自分たちで用意し次々に制作が始まっていき、途中には実際に作ったものを使ってみて気づいたことを改良していった。帰る前の少しの時間を利用したり、自分のできる仕事を探し取り組んだり、分担したりなど子どもたちの生き生きとした表情がたくさん見られた。お店屋さんがほぼ出来上がった時に一人の子が「買い物するならお金がいるよね」と言った。昨年も年長さんがお金を作ってくれたことを思い出したが、お金がたくさんだと商品を持ったりお金を出したりすることが大変だったという経験を教えてくれる子もいた。「小さい子が何枚もお金を持っていると落としてしまうかもよ!」ということで、家庭での買い物場面を思い出して見るように話を振ると、ペイやカードで支払う方法がでた。そこで各店舗に置く電子マネーで支払う機械と、一人に1枚ずつクラスの名前入りの「あおばペイカード」を制作することになった。自分たちで昨年度の作品展を思い出しながら、経験を活かして実現しようと行動し、子どもたちなりに小さい子に向けて最大限の配慮をしながら取り組んだ作品展のお店屋さんごっこ。当日も大盛況で振り返りでは、「みんなが「楽しかった」と言うてくれて良かった。作ったかいがあったわ!」「自分が作りたいかったおみせを作れて良かった!」「あおばペイだったから、落としている子はいなかったよ!」と小さい子が楽しんでくれたり、保護者の方に褒めてもらったりして大満足の子どもたちだった。こうした年長児の姿をみて他学年でも子どもたちのやりたい!こんなものを作りたい!という対話を大事にしていった活動がどんどん広がっていった。

- ・年中(さくら組)・・・さくらオリンピック、サンタ×らーめん(壁面)、演奏会
- ・年少(もも組)・・・すいぞくかんごっこ
- ・2歳児(たんぽぽ組)・・・たこあげ

(4) 反省と考察

研究を通して子どもたちの「やってみたい」は生活の中からうまれることが多くあり、大人の真似や年上の子の真似、憧れや体験したこと、子どもを取り巻くすべての環境が大事だと痛感した。教師はアンテナを高く子どもの小さなつぶやきの中に保育のヒントはたくさん隠れていると思いながらキャッチできる教師の心構えも大切だと思う。失敗も、成功も共に考え喜び合うことの重要性を感じ、すぐ活動に移せるように担任はフットワーク軽く子どもの思いにいつでも寄り添えるような環境を普段から作っていくことが大事だと考えた。教師の「しかけ」は保育室、園内、園庭、取り巻く物的環境や友だち、異年齢との関わり、教師、保護者などの人的環境の中にもある。担任が他の職員との連携で活動の幅もグンと広がることも実感した。

(5) 今後の課題

今後の課題としては「やってみたい」を途切れさせないための工夫の1つとして、環境構成が大切だと考える。例えば、子どもたちが興味を持ったことについて、調べられる物が部屋にあるというような物的環境、学年にとらわれず一緒に遊んだり、お互いの活動を見たりする中で「楽しい」の輪を広げたり、職員同士で情報交換をすることで他のクラスの活動に興味をもつきっかけにもなったりする異年齢や職員の人的環境が「やってみたい」の連鎖になるのではないと思う。そうすると自然と「させる」から「やってみたい」という気持ちに変わっていき、活動の幅も広がる。考えたり準備したりすることが少し大変だなと思うような大きな行事も、子どもたちの「やってみたい」から始めて一緒に行事を作り上げながら、構えることなく教師自身も楽しんで取り組んでいきたい。

◎研究討議(1) 発表内容に対する質疑応答

Q.限られた時間や迫ってくる行事のなかで、どうしても教師主体になってコントロールしてしまうことがある。子ども主体で進めていくなかで時間等のしほりを感じられることはなかったか?

A.教師自身がしほられないように余裕をもって行事のすぐ前から子どもたちにおろして話し合いをしていっている。早いうちから保育を組み立てていくと行事間近にしほられることはない。

Q.話し合いの際に子どもたちの意見が合わなかった時にどのように教師が援助したか?

A.とことん話し合う。どうしても決まらない時は決め方も子どもたちに委ねる。その結果、にらめっこで決めたこともあり、自分たちで決めたやり方だと意外とすんなり納得できる。

Q.自分の意見が言えなかったり、あまりやる気がなかったり、意見が通らずやる気をなくしたりする等の問題もあるのではないと思うが、そのような子はいなかったか？

A.意見が言えない子には「どう思う？」と意見を求める。普段からみんなの前でしゃべるという経験を増やしていく事で抵抗なく意見を言えるようになっていく。またやる気のない子がいたらその子から担当を決めたこともあり、自分ができる役割をもつようにしていく。

(2) グループワーク

①子どもと大人の思いが一致し共に準備を進めていく過程を通して、大満足で取り組み達成感を味わうことができた実践経験はあるか？

→担任の先生へサプライズでありがとう会（内緒でと言ったら子どもたちが団結して進めていった。）、発表会の劇（子どもたちが一からストーリーを考えて作り上げた。）、リレーの走順（涙がでることもあったが、最後まで頑張った。その姿を保護者に見てもらえた。）、夏野菜を育てる（収穫してみんなでクッキングをして食べる。）、園周辺のマップ作り、自由遊びでの好きな遊びからみんなでの遊びに発展させていった・・・など。

②保育の悩みや難しさに心が折れそうなこともあるが、それでもこの職を続けていける心の栄養はどのようなものがあるか？

→保護者からの感謝の言葉、同僚と話をしたり、飲みに行ったりすること、子どもたちの成長や笑顔、子どもたちの育ちを保護者の人に認めてもらうこと、自分の楽しい事やプライベートを充実させる、行事が終わった時の達成感、教え子が先生や実習生になって帰ってきてくれた・・・など。

◎指導助言

子ども達の創造性を後押しするもの ～「やってみたい！」からはじまる保育をめざして～

保育者が子どもに対して、成長への一步をいかに踏み出しやすくできるのかを考え、その一步に必要な援助を判断することが「見極め」といえるのではないかな。この見極めが大切になってくる。＝「対話」の積み重ね、日々積み上げていくこと、やってみたい！や面白そう！を見逃さないアンテナが必要になる。

あおば幼稚園は環境・人・表出によるワクワクやエネルギーがつまっている➡創造性 (creativity)

創造性のプロセス（どのように発生するのか…）①試行錯誤／準備 ②あたため／潜伏 ③ひらめき／洞察 ④検証／評価 特に保育では①～③を大切に。イメージはガチャガチャ！子どもたちは色々な経験を通してガチャガチャのボールを準備してあたためている。そのひらめき（ガチャガチャのボール）を後押しするのは、保育者の一押し！豊富な問いかけでひらめきのための刺激を与える。また他者（お友だち）からの一押しも大事！自分とは異なった立場や視点に出会い「外化」を繰り返すことで、またさらに自分の経験に入る。

子どもたち一人ひとりのガチャガチャ、保育者のガチャガチャをみんなでシェアすることでクラス全体のガチャガチャも出来上がっていき新たなひらめきが誕生していくのではないかな、今後はそこにもぜひ注目して考えてみてほしい。創造性は欲しいときにすぐでないが、あたためが大切になってくるので日々「対話」を積み重ねて過ごす。



発表の様子

指導助言



グループワーク